様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ４ 月　 ２ 日現在

機関番号：２７１０３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２００３８

研究課題名（和文）近世フランスを中心とした信の観念史的研究

研究課題名（英文）Historical Research of the Concept of Faith with a Focus on Early Modern France

研究代表者
御園　敬介（MISONO, KEISUKE）

福岡女子大学・国際文理学部・准教授

研究者番号：６０５８６１７１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：17世紀から18世紀にかけてのヨーロッパにおける知の枠組みの理解に新たな知見をもたらすことを目的に、近世フランスを中心とした「信」の観念をめぐる思想史的研究をおこなった。それにより、近世以降、「信仰分析」と呼ばれた新しい思考の試みとともに、さまざまな宗教論争のなかで「信じる」という認識にかんする思索が続けられたことが明らかにされ、従来見過ごされてきた「信」の哲学的側面にかんする一つの思想的系譜の存在が浮かび上がった。

研究成果の概要（英文）：To shed new light on the understanding of the framework of ‘knowledge’ in Europe from the 17th to the 18th century, the present writer undertook an intellectual history of the concept of ‘faith’, with especial focus given to early modern France. As a result of this genealogical analysis, it was found that amidst ongoing religious controversies, a philosophical, and hitherto overlooked, way of looking at ‘faith’ [‘analysis fidei’] emerged.

研究分野：フランス思想史

キーワード：信仰分析　ジャンセニスム

１．研究開始当初の背景

「信仰」という言葉は、一般に宗教の領域で用いられ、超越的で非合理的な要素と結び付けられることが多い。じっさい、希望・愛とともに対神徳を形成する信仰は、古来よりキリスト教文化圏において、霊性や道徳の主題を形成してきた。しかし、信仰は同時に、知識と臆見の中間に位置する認識の様態を示す観念（「信」）でもあり、中世以来、思弁的学問の対象とされてきた。近世ヨーロッパにおいて、信仰は宗教（霊性）の領域に繋ぎ止められたように見えるが、信の観念はその後も思索の対象として深められ、受け継がれる。その動態は、近代ヨーロッパにおける大きな知の動きを照らし出す興味深い対象を形成しているが、近世哲学史において、信仰のこうした哲学的側面はしばしば見過ごされ、観念史的な考察はなされてこなかった。

本研究課題の代表者は、これまで、十七世紀半ばのフランス社会を揺るがした「ジャンセニスム」論争（スペイン領フランドルの都市イーペルの司教ジャンセニウスの主義主張をめぐる宗教・政治的な論争）に注目した研究を行ってきた。その過程で、信の観念をめぐる思想的対立の様相を見せたこの論争の追跡を通して、近世ヨーロッパにおける信の観念史の可能性と重要性を意識することとなり、その思想史的意義を解明すべく本研究を構想するに至った。

２．研究の目的

近代において理性の対極に位置づけられることが多い信の観念は、これまで厳密な学問的研究の対象とされることは少なかった。本研究課題は、西欧の哲学的伝統の底流を成してきた信の観念史という埋もれた水脈を掘り起こし、近代哲学の展開と並行するもう一つの思想の系譜を明らかにしようとする。その目的は、近代ヨーロッパにおける知の枠組みをより精緻に理解するための新たな知見をもたらすことにある。

３．研究の方法

ギリシア哲学から中世を経て近代へ受け継がれてきた西欧における信をめぐる思索の変遷を総合的に描き出すことは、限られた研究期間内で実現することは難しい。本研究は、その第一歩として、観念の動態が最も明確に見て取れる近代初期に焦点を絞り、信じるという認識行為にかんする考え方の変遷を辿る。具体的には、次の三つの問題に着目して研究が進められる。①十七世紀初頭にはじまる「信仰分析 analysis fidei」と呼ばれた試みの内実と展開、②十七世紀中葉のジャンセニスム論争における信の観念をめぐる論争とその思想的意味、③十七世紀後半から十八世紀初頭にかけての、信仰分析論争とその継承。

信仰の哲学的側面に関わる以上の諸点に加え、神への愛に裏付けられた徳の実践としての信仰の側面にも注意を払う。それにより、近世における「信仰」の問題について、より総合的な視野が確保するためである。カトリック改革期の信仰実践の一例として、「聖体会 Compagnie du Saint-Sacrement」と呼ばれる秘密結社の活動が、とくに分析の対象になる。

実際の研究方法としては、一次史料の収集と読解を基軸とした文献学的手法が採用される。また、テーマの性質上、本研究は、歴史・哲学・宗教・文学の各領域を横断する多角的なものとなる。

４．研究成果

以下、本研究の成果とその意義について、上述の研究方法から導かれるテーマ設定に即して記す。

十七世紀初頭の「信仰分析」については、それが近代に生まれた思考様式であり、やがてジャンセニスム論争に受け継がれていく論点を提供するものであることが明らかに

された。十七世紀初頭から、トマス・アクィナス『神学大全』の註解を進めたイエズス会の神学者たちが、信仰の主体にかんするトマスの思索を推し進め、信じるという行為 actus fidei の認識論的根拠を問い直す試みに着手する。「信仰分析」あるいは「信仰解析 resolutio fidei」と呼ばれた思考がそれであり、スアレス（1548-1617）、ベカヌス（1563-1624）、グラナド（1574-1632）といった一連の著述家が、この試みを支えていた。それは、信の根拠を突き詰めていけば、人間的な推論に到達するのかどうかという問いに正面から取り組むもので、信をめぐる新しい見方の登場を示している。

十七世紀中葉のジャンセニスム論争は、明示的にではないが、この思想傾向を汲んでいる。ジャンセニウスの教義の正統性をめぐる神学論争に端を発するジャンセニスム論争は、ローマ教皇庁によるジャンセニスムの異端宣告を受けて、その決定をどのように信じるかについての思想的対立へ転化していった。神的信、人間的信、教会的信といった様々な信の種類が提示され、それぞれの性質が入念に検討されたこの論争は、結局のところ、「信仰分析」の試みを進展させた成果と言える。例えば、「教会的信」は、ジャンセニスム論争の中で新たに生まれたものとされてきたが、信仰分析論者の思索との類縁関係は明らかである。カトリック内部の閉じられた宗教対立のように見えるジャンセニスム論争は、近代における「信」の思想展開に大きな役割を果たしている。

「信仰分析」が十八世紀初頭まで受け継がれていく経緯については、まず、十七世紀後半のプロテスタントとカトリックの論争に注意を払わねばならない。時間的にはジャンセニスム論争の後に来るこの論争は、従来、聖体の秘蹟をめぐる教義論争の側面に注目されることが多かったが、別の重要な論点として、信仰分析の問題を含んでいた。両派が信仰の正統性を争う過程で、議論は、信の根拠を、各自の理性的検討に置くのか、教会の権威への信頼に置くのかという方向にも向かったからである。この論争が解決を見ることなく続けられていた十七世紀末になると、ジャンセニスム論争が再燃する。教会の決定事項を受け入れるべく「ジャンセニスト」が主張した「恭しい沈黙」なる態度の是非をめぐって、再び議論が始まるのである。十八世紀に入って筆を執ったフェヌロンはそこで、信と不可謬性に関する新たな理論化を試みており、それは信仰分析論争の議論の系譜を受け継ぐものとなっている。

実際の信仰生活の実践面での事例として、聖体会という慈善活動組織に注目し、その実態と意義の検討を行った。全国に組織網を広げながらあくまで秘密結社として活動したこの一団の辿った運命は、ジャンセニスムの牙城とされたポール＝ロワイヤル修道院の歴史と深くかかわりあっている。前者から後者への敵対的視線はこれまでよく指摘されてきたが、本研究は、人的ネットワークを部分的に共有し、同時期に政治権力による迫害の対象となったこの二つの組織が、王権や当時の一部の論者のなかで結び付けて捉えられていた点を明らかにした。これは、カトリック改革運動として始まった運動が「ジャンセニスム」としてなぜ長期にわたる政治的迫害の対象になったのかを再考する題材を提供するものと思われる。

今後の展望として、以下の二点について、より精緻な考察を行うことが有意義であると思われる。第一に、近世ヨーロッパにおける初期の信仰分析論者の思索の内実と意義にかんする哲学的研究。これは、信をめぐる認識の変化を辿る際の重要な指標となるはずであり、いまだ探究の余地を多く残している。第二に、ジャンセニスム論争特有の観念である「恭しい沈黙」の誕生と継承にかんする歴史的研究。その探求は、信仰分析論争か

ら寛容あるいは良心の自由の歴史への橋渡しの役割を果たしてくれる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① 御園　敬介「ジャンセニスムと政治－聖体会をめぐって－」、『日仏歴史学会会報』、査読有、第 29 号、2014、p. 3-20.

② Keisuke MISONO, « La polémique janséniste dans l'histoire de l'*analysis fidei* », in *Studies in the humanities*, Faculty of Literature, International Faculty of Arts and Sciences, Fukuoka Women's University, 査読有, vol. 78, 2014, p. 103-124.

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
御園　敬介（MISONO, Keisuke）
福岡女子大学・国際文理学部・准教授
研究者番号：60586171

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：